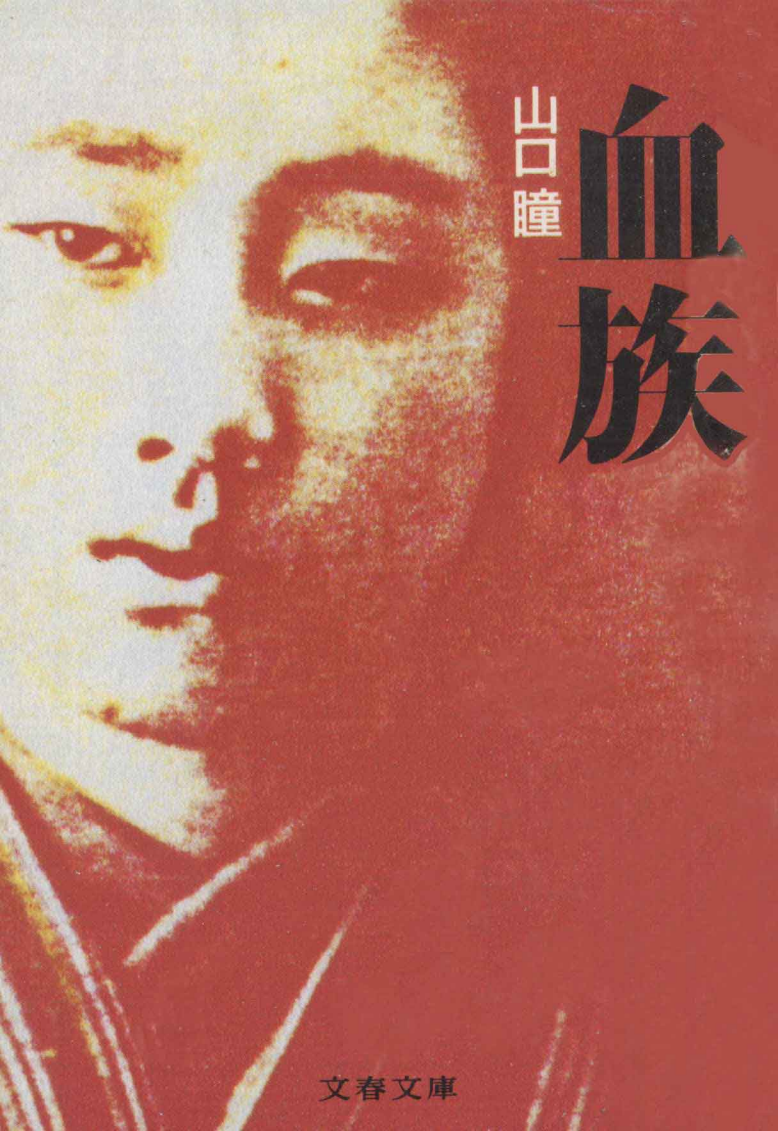




山口瞳

血族

文春文庫



文春文庫

123—4

血 族

定価はカバーに
表示してあります

1982年2月25日 第1刷

1983年11月15日 第6刷

著 者 山 口 瞳

発行者 西 永 達 夫

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3—23 〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが、小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan

又春文庫

血 族



血

族

単行本「血族」は昭和五十四年一月文藝春秋刊

私は、自分の家にあつた、空襲で焼けてしまった一冊のアルバムについて二度書いたことがある。ここで、また、その写真帖の話をするとなると、三度目のことになる。文章を綴ることと商売をしている人は、誰でも、一度は自分の家にあるアルバムについて触れることがあるのではなかろうか。

二度目のとき、私は、妙なことに気づいた。そのことに、いままでずっと気づかないでいたことに驚いた。深夜、いそぎの原稿を書いていて、そのことに気づいて、びっくりして筆を擱^おいてしまった。私は、しばらくのあいだ、朝までに原稿を書きあげなければいけないということを忘れてしまつて、茫然としていた。

そのとき、私は、ある綜合雑誌に頼まれて、田中角栄論を書いていた。明治生まれと大正生ま

れという違いはあるのだけれど、私は、田中角栄と私の父との対比を試みようとしていた。田中角栄も父も一旗組であり一発屋である。ともに貧しい家に育ち、頭が良く、刻苦勉励した。実際、青年から壮年時代にかけての父の顔と、昭和二十二年に最初に衆議院選挙に当選したころの田中角栄の顔とは驚くほどよく似ていた。二人とも、少壮の実業家らしく、髪を短か目に刈り、七三にわけ、おさだまりのチョビ髭をはやしていた。そのことを書くために、いまはもう焼けてしまつて家にはない一冊のアルバムの記憶をよびもどす必要があったのである。

田中角栄は、もはや、一種の名著であると言つていい（本当に面白い読みものである）ような自叙伝であるところの『私の履歴書』で、こう書いている。

「三月三日、桃の節句の日に二人はいっしょになった。戦争が苛烈さを加えてきたころなので、はでな結婚式も披露の宴もできず、二人がその事実を確かめ合うだけでよかった。」

私はこの箇所を読んだとき、あやうく、嘔吐キヤガレと叫びそうになつてしまった。

この三月三日というのは、昭和十七年の三月三日である。前年の十二月八日に大東亜戦争に突入し、たしかに「戦争が苛烈さを加えてきたころ」ではあったが、私の記憶によれば、むしろ、昭和十七年三月三日は、内地では、まだ戦捷気分酔っていたところと言つたほうが正しいように思われる。東京では、まだまだ、物資は豊富であった。まして、田中夫人の実家は、東京でも指おりの土建業者であつたし、田中角栄自身も、そろそろ頭角をあらわしはじめた青年実業家であつた。結婚式や披露宴のできない時代でも境遇でもなかった。

田中夫人は二度目の結婚であり、夫より八歳の年長だつた。そういう事情があつたにせよ、結婚式や披露宴ができなかったのは戦争のためではなかった。私は、そう確信した。田中角栄には、

当時、婚約者がいたという説があり、その女性には健在で、今でも酒場を経営しているという噂がある。私は、田中角栄の結婚は、結婚式をあげられるような結びつきではなかったと推測している。まさに、自分でも書いてるように「事実を確かめ合うだけ」のものだったに違いないと考えている。

一昨年（昭和五十一年）の秋のある夜の夜おそく、そんなことを考えたり書いたりしているときに、私は、奇妙な事実に突き当たったのである。まさかそんなことがあるはずはないと思い、それはおかしいと思うのだが、どうしても思いだせない。それは、まったく私の記憶に残っていない。——つまり、そのこととは、あの戦災で焼けてしまった一冊のアルバムに、父と母との結婚式の写真がないということなのである。母の角隠しの花嫁姿がない。どうしても思いだせない。私は、戦前において、そのアルバムを何度も見ているから、結婚式の写真がないというのは、疑うことのできない事実なのである。

そのアルバムの第一頁は、早稲田大学の角帽をかぶった父の顔写真になっている。大きさは、ちょうど文庫本の大きさぐらいだった。非常に立派な顔をしている。早稲田大学校歌の一節の「進取の精神、学の独立。現世を忘れぬ久遠の理想」を絵にしたような凛々しい顔になっている。それは写真館で撮った写真であって、修整がひどくされていたに違いないが、写真館のウィンドウに飾ってあったとしても少しも不思議がないような立派な顔つきである。

第一頁の写真は一枚だけで、第二頁は、その父のうしろむきの写真になっている。上半身というより胸から上だけの写真と言ったほうがいいが、裸体写真である。父は胸を張り、両手をあげ、その左右の手を肘のところで屈折させている。背中の筋肉を誇示する形であろうか。いまで言え

ば、ガッツ・ポーズであろうか。父は長身ではなく、昔で言えば中肉中背、現代の若者と比較するとやや小男の部類になってしまいが、その背中の筋肉は実に見事だった。ボディビルのようないかにも不自然な、人工的な筋肉ではなかった。筋肉は隆々としていて、しかも、写真でもその柔らかさが感じとられた。美しい色白の肉体である。若さが漲^{みなぎ}っていて、はちきれそうな体だと言ってもいいだろう。疑いもなく、父は美青年だった。凛々^{りんりゃ}しくて逞しい若者だった。裸になると見られたものではないという質の美青年ではなかった。父の肉体は、あきらかに、一種の運動家の体つきを示していた。それは水泳と柔道と野球によって鍛えられた体だった。父は横須賀市の生まれであり、祖父は釣の名人であったから、あるいは櫓を漕ぐことがあったかもしれない。しかし、ある種のスポーツマンに見られるような、筋肉だけで固められてしまったような体ではなかった。要するに、それは、運動で鍛えられた体が若さを発散しているという態^{てい}の写真だった。

私の推測では、第一頁の写真と、その裏の第二頁の写真とは、同じ日に撮影されたものだと思う。写真館の主人が父の体つきに惚れこんで、上半身裸体の写真を撮ったのではあるまいか。また、この写真は、たぶん、父の早稲田大学入学の際の記念写真であつたろうと思われる。しかし、その父の体は少年の体つきではなかった。父は横須賀中学の入学試験に一番で合格し、首席で卒業していた。とても中学に進学させられるような家庭状況ではなかったが、父は祖父に内緒で受験して、その成績がトップだったということで、辛うじて進学が許されたという話が伝わっている。そんなふうだから、父は、中学校を出るには出たが、旧制の高等学校や大学の予科に進むことができなかった。父は働いて金を溜め、専検をパスして、大学入学の資格を得て、早稲田大学理工学部の補欠入学の試験に合格したのである。それは三十人に一人という難関であつたそうだ。

だから、そのときの父は、二十歳を二歳か三歳か越えていたのではあるまいか。

私が、そのアルバムについて、正確に記憶しているのは、第一頁と第二頁、つまり、最初の紙一枚だけであって、あとは散漫になってくる。あとの何葉かの写真は、どういう順にならぬいたか、まるで記憶がとぎれてしまっている。

たとえば、母の兄と、その従弟であるらしい青年が、野球のユニフォームを着て、バットを持ってならんでいる写真があった。それも写真館で撮ったものであり、バックは野原と森の絵になっている。これにも、著しい修整とボカシがほどこされていた。あと何葉かの父の写真があったはずである。母の兄が出てくるのは、当時、彼と父とが非常に親しい仲にあったためである。二人は、主に、野球で結ばれていた。そうして、父と母とは、歌留多取りで親しくなったようだ。

母は、百人一首の歌留多取りについては自信があったようだ。母の娘時代には歌留多取りが盛んであって、正月にかぎらずに競技会が行われていた。その母を容赦なく打ち負かしたのが父であった。私は歌留多取りについては全く無智であるが、父は母を大差でもって負かしたのである。多分、母は、鼻っ柱の強い生意気なお転婆娘だったと思われる。母の名は静子である。だから、ひさかたのひかりのどけきはるのひにしずこころなくはなのちるらむ、という一枚は母の得意の札であった。誰にも取られてはいけなそう思いつめている札だった。それさえも父に取られてしまったという話をしてくれたことがある。その話をするときに、母は、顔色が悪くなり、体を震わせているような感じがあった。当時の母の傷心ぶりがわかるような気がする。父は、母に較べて、記憶力が良く、運動神経が発達していて、しかも勉強家であったことは間違いない。

アルバムの話になるけれど、そういう、父の周辺の幾葉かの写真があって、突然、まったく突

然という感じで私の赤ん坊の時の写真が出てくるのである。それは、私にとって、まことに怖い写真帖だった。

父も母も写真が好きだった。当時の写真は、写真館へ行くか写真技師を呼ぶかして撮る以外にはない。カメラを持っている人は稀であったに違いない。父も母も、写真館へ行くのが好きだったのだと思う。おそらく、写真館へ行くということは、一種の贅沢であり、モダンな行為であったのではないかと思われる。

それが、父方のアルバムであるとすれば、もう一冊、母方のアルバムがあった。それには、主に母の娘のころの写真が貼りつけてあった。母は、公平に見て、かなりの美人だった。目が大きくて鼻筋が通っている。スタイルも悪くはない。横須賀の海岸で、最初に海水着を着た女性として写真入りで新聞ダネになったこともあるのである。母の顔には、全体として、利かぬ気があらわれていた。

二冊のアルバムは、昭和二十年五月二十五日の東京の山の手一帯を襲った爆撃で焼失してしまった。母方のアルバムは、母だけで終始していたが、やがて、母の写真は、父方のアルバムに移行することになる。しかし、私の言うところの、一冊のアルバム（父方のアルバム）における母の写真については、私は、おぼろげな記憶しか残っていない。

父の青年時代の写真、母の娘時代の写真、私の赤ん坊の時の写真、私が生まれてから後の父母の写真、そういう写真についての私の鮮明な記憶とおぼろげな記憶が残っているが、当然、私の赤ん坊の時の写真の前にあるべきところの父母の結婚式の写真が無いのである。披露宴の写真が無い。新婚旅行の写真が無い。もっと言えば、私の生まれる前の何年間かの写真が一枚も無いの

である。私は、そのことに、ずっと気づかないでいた。一昨年（昭和五十一年）の秋、田中角栄論を書いていて、田中角栄の結婚のあたりを書きだそうとするときまで気がつかなかった。気がついたとき、体が熱くなった。

おそらく、私の二人の妹は、

「お母様の結婚式のときの写真はないの？」

「お母様の花嫁姿ってどんなふうだったの？ 写真があったら見せてちょうだい」

といったような質問をあげせかけることがあったと思う。そのとき、母がどう答えたかを私は知らない。父母の結婚についての質問や詮索は私の家では禁忌になっていたはずである。ただし、私にはそういう意識はなかった。いまになって気がついて驚いている始末である。私は、子供のころ、そんなことはどうだっていいやと思っていた。

そうではあっても、そのアルバムが怖いものであることに変わりがなかった。突如として出てくる生後三カ月ぐらいの私の写真がこわい。そのこわさは、当人にだけしかわからないような、曰く言い難いところのこわさである。

父にとっても、母にとっても、そのアルバムは、子供たちにあまり見せたくないアルバムであつたに違いない。そうかといって、青年時代の父の写真、娘時代の母の写真が残っていないとしたら、それもまた、いかにも不自然である。特に私に対して、私の赤ん坊の時の写真がないとすれば、困ったことになる。新婚時代（そう言ってもいいと思う）の写真がないというのもおかしい。たとえ、結婚式の写真がなかったとしても――。

また、父にしても母にしても、それは一種の栄光の写真帖でもあった。特に、早稲田大学の制

帽をかぶった父の写真などは、記念として残しておきたいものであったろうし、自慢の種であったに違いない。

私とその写真帖を怖いと思うのは、以上のようなことからではなかった。そのアルバム
の終りのほうに、とてつもなく大きな家の写真があった。それは父母の家であり、私の家だ
った。私の記憶では、その家は木造二階建の洋館であり、戸越銀座を見おろす岡の上に建
っていた。ただし、アルバムにあったのは、まさに豪邸であるところの家の上棟式じょうちゆうしきの写
真だった。柱が組んであるだけの家の前に、外套を着た父が立っていた。その父の姿が、ま
ことに小さい。

その家に住んでいたとき、当時としてはまったく珍しい自家用自動車があり、家には
運転手と料理人と三人の女中がいた。それは、私にとってマボロシの家だった。その家
に住んでいた期間は非常に短かったはずである。私にとって、その家の上棟式の写
真が残っているのはこわいことなのであるが、その後に続く事件のほうがもっとこわい。

2

私の名は母がつけたものである。これは、平凡なようである。非常に変わった名である。
むずかしい文字を使ったものではなく、むずかしい訓みであるのではない。その意味では、
ごく平凡なのであるが、これを人名とすると、凡ではなくなってしまう。特に、これが、男
の名前とすると、めったにある名ではない。私自身は、斬新奇抜な名だと思っている。

私は、自分と同じ名の男に会ったことがない。たった一度だけ、戦争中に、新聞紙上でその名を見たことがあるだけである。その人の名は大西瞳と言った。特攻隊員で、攻撃に参加して還ってこなかった人たちのなかにその名があった。特攻隊員であるのだから、これは男である。

四年か五年前のことになるが、税務署から、多額の申告洩れがあるという通知があった。そんなことがあるわけがないと思って、女房が立川の税務署へ出向いてみると、その収入は電通扱いになっている。私は勤務先の関係もあって、電通の仕事をしたことがない。調べてもらうと、女優の八千草薫さんの収入が、私のものに紛れこんでいたのだということがわかった。

女房の報告を聞き、私は、次のように推理した。八千草薫というのは、文字を見ればすぐにわかるように芸名であって、本名は瞳である。私は、芸能関係のゴシップ記事でそれを読んだことのあるの思い出した。八千草薫さんの御主人は、映画監督の谷口千吉さんである。谷口千吉が本名であるとすれば、八千草さんが税金の申告をするときの名は谷口瞳ということになる。電通が税務署に届け出るときも谷口瞳が使われることになる。そこで誤って、私のほうにまぎれこんできたということになる。私は、そんなふうに推理した。美人女優に間違えられたのだから、それほど腹も立たなかった。これも、めったにはない名であるために起った間違いなのではあるまいか。電通の係りの人が、谷口瞳という文字を見て、それが女優の八千草薫さんの名とはわからずに、咄嗟に私のものと判断したのだろう。これでもわかるように、瞳というのは女名前なのである。

たとえば、女房と二人で温泉宿にでも泊ったとする。旅館の女中は、まず間違いなく、女房のほうを小説家だと思いこんで、女房にむかって先生と言ったりするようになる。そうでなければ、

怪訝な顔で二人を見較べるようになる。宿帳に「山口瞳（著述業）、妻」と記入するからである。私は、男の読者から、何度かラブレターをもらっている。そのなかに「あなたは東京の女子大を出た才媛（さいえん）でしょうが、私は地方都市の高等学校しか卒業していません」という文面のものがあった。こういう滑稽な話は数限りがない。

それは、最初に、小学校に入学するときに、女組に編入されることからじまった。ごく最近では、空港の搭乗者名簿に記入する際に、顔をジロジロと見られるということがあった。それでも、学校にいるときは、まだしも良かった。軍隊では困った。軍隊では、便所へ行くときも、大声で「――、厠（かわ）へ行ってまいります」と嘯（ご）鳴らなければいけないのであるが、私の名は、それにふさわしくなかった。私の名は、戦時中では、それだけで非国民という印象をあたえかねないものだった。

私の兄も弟も一字名前であるが、これは、ごくありふれた、どこにでもあるようなというよりは、むしろ、多過ぎて困ることのあるような名である。どうして、母は、私にだけ、瞳という斬新奇抜な名をつけたのだろうか。およそ、人体の名称部位をそのまま名前にしてしまうのは、きわめて珍しいことなのではあるまいか。私自身、自分の名が心のなかで定着したと思ったのは三年ばかり前からのことである。私が生まれたのは大正の末であるが、現在でも、男名前としては斬新奇抜であることを失わないと思っている。そうかといって、私は、自分の名が特に嫌いであるのではない。

いったい、母は、どうして、こういう名をつけたのだろうか。

私が生まれたとき、赤ん坊としては実に目の大きな赤ん坊であったという。人間の眼球の大き

さはほぼ一定であるので、露出している部分が多いと言ったほうがいいだろうか。母も目の大きい女だった。

明治の初期から中期にかけて生まれた男は、たいてい、号を持っていた。例をあげれば、幸徳秋水、堺枯川、荒畑寒村といったようなことになる。また、明治の末から大正年代には、他人に渾名あだなをつけることが流行した。そのなかに、支那名前があった。母がつけられた渾名のひとつが「大眼玉」だった。そのほかに「涙腺子ルイセンゴ」や「大深寝」があったという。つまり、母は、目が大きくて、涙もろく、寝坊癖があったようだ。「大深寝」から想像されるのは、大正の末の浅草オペラのヒットソングである「ベアトリ姉ちゃん、まあだあねんねえかい」という歌である。実際に、母はその歌でからかわれることがあったようだ。父の渾名は「常無銭」であり「顔蒼白」であった。父は貧乏書生であり、いつも蒼い顔で勉強ばかりしていた。

「大眼玉」の最初の子である私は、目が大きかった。そのうえ、私は仮死状態で生まれたのだという。医者や看護婦が私を逆さに吊して、尻を撲ったりして、私が産声をあげたのは、生まれてから二時間か三時間の後であった。

私は、ちいさくて、痩せこけていて、体の弱い赤ん坊だった。だから、余計に目の大きいのが際立っていたのである。これが、私が腫という名をつけられた由来の一因である。

大正の末に、菊池寛の新聞小説が喝采を博していた。菊池寛の小説は、大正末期のモダンを代表していた。そのなかのひとつに、たぶん『新珠』だと思うのだけれど、都、梢、腫の三姉妹を主人公とする小説があった。私の母がこれにヒントを得たことは、まず間違いがないと思う。ただし、これは、もちろん、女名前である。そうして、母は、腫という名の登場人物の性情に惚